

UNIVERSITY
JOURNAL

全大教時報

Vol. 42 No. 1
2018.4

大学共育と平和学

～学生が平和のための学びの主人公になる(上)

和田 寿博 <愛媛大学法文学部 教授>

工学系研究室のワークライフバランスについて

市来 龍大 <大分大学理工学部 助教>

労働問題ブックガイド

岡田 健一郎<福岡教育大学教育学部 教授>

ローカル線で行く! フーテン旅行記(17)

—「西郷どん」の故郷 鹿児島県の2つの半島を巡る!—

大西 孝 <岡山大学工学部 助教 >

Contents

● 大学共育と平和学 ～学生が平和のための学びの主人公になる（上） 和田 寿博（愛媛大学法文学部 教授）	1
● 工学系研究室のワークライフバランスについて 市来 龍大（大分大学理工学部 助教）	9
● 労働問題ブックガイド 岡田 健一郎（高知大学人文社会科学部 准教授）	15
● ローカル線で行く！フーテン旅行記 17 —「西郷どん」の故郷 鹿児島県の2つの半島を巡る！— 大西 孝（岡山大学 工学部 助教）	20

大学共育と平和学 ～学生が平和のための 学びの主人公になる(上)

愛媛大学法文学部 教授

和田 寿博



1963年兵庫県生まれ。日本平和学会会員。戦前戦後の企業経営を専攻し、戦争体験記録に取り組んでいる。学生の広島・沖縄・韓国・中国・台湾などでの平和友好の旅を支援している。

はじめに

2004年の法人化を前後して、愛媛大学では主に1・2回生が受講する共通教育科目が設置された。私は共通教育科目の「地域と世界」などの授業を担当し、主に平和学を副題とした内容を扱っている。2017年度の場合、主に1回生約1700人のうちの450人が受講する最大の授業になっている。本稿では、平和学を基礎に戦争体験記録や平和友好の旅に取り組む学生の様子を紹介する。

1. 大学改革と平和学の開講

1990年以降、私は大学院生としての専攻研究のため、戦後初期の日本企業や所轄官庁の関係者を取材して戦前戦後のことを聞くようになり、1994年に愛媛大学に任用されてからも、今日まで四半世紀の間、戦争体験記録に取り組んでいる。

2000年当時、学生の社会的関心は、箱物公共事業や産廃・リサイクルなどにあった。2001年2月10日のえひめ丸事件、同年9月11日の米国同時多発テロとそれに続くアフガン・イラク戦争、2005年の戦後60年、さらに日韓ワールドカップや韓流ブーム、朝鮮半島情勢、北京五輪などを背景に、学生は「戦争と平和友好」に関心を強めた。2003年と2004年に私が担当した共通教育科目では、えひめ丸事件やテロと戦争について、学生の関心が高まり、私自身、「学生が戦争と平和に関心を持つのか？」と不思議に思いつつ、学びの機会を提供するようになった。

2004年には松山市在住の元高校教師で、1944年に海軍に志願し、終戦時に山口県徳山で人間魚雷「回天」乗員として訓練を受けた男性のお話を聞く機会を設けた。15歳だった彼は軍国少年として海軍飛行予科練習生に志願したこと、なれない訓練と暴力により意志を喪失したこと、戦争末期にもかかわらず戦死を覚悟したこと、戦後は山村の自宅で放心の日を送ったこと、復学した学校で禅や哲学書にあたり、演劇を見て人間性の開放に目覚めたことなどを話した。学生は彼の戦争体験に強い関心を示し、私が戦争体験を知る機会を中心とした平和学の授業を開講するための大きなきっかけになった。

2004年秋、次年度からの共通教育科目に関し、学生のニーズに応えた授業改革が求められ、「平和学はどうか？」と呟いたところ、担当教員から「是非、やってください」と激励され、心細いながら準備をした。

こうして、2005年以降、私が担当する共通教育科目として半期15コマ(2単位)の「平和学」を開講している。

その内容は日本平和学会の知見と戦争体験の記録をふまえ、「おじいちゃ

ん、おばあちゃんの戦争体験を聞く」ことが特徴である。これまでの授業では、60歳から93歳の戦争体験者をお招きし、戦前戦後の暮らしや家族・学校・地域、出征と戦場、勤労働員・学徒動員、空襲、被曝、海外事情、復興、父・兄弟や家族・知人・友だちの死、学生に伝えたいことなどをお話いただいた。またカンボジアなど海外の紛争地の訪問や東チモールで平和構築に取り組む人、日本でシリア人の難民支援をしている人の経験をお話いただいた。学生は強い関心を持ち、真剣に聞き入り、感想を述べ「ありがとうございますました」と感謝を申し上げるようになった。

戦争体験者の多くは、ご自身の体験を子や孫に話したことが多く、匿名希望の場合もある。「今、伝えなければ」「二度と繰り返させたくない」との思いで、70年前のことを詳細に話される。人間の記憶の底深さとそれを生み出す強烈な戦争体験への思いを感じる。

学生の多くは入学までに戦争体験に接することがない。しかし、平和学と戦争体験記録に取り組んだ学生は次のような感想を述べている。「戦争の要因を知り、どうすればなくなるかを知りたい」「戦争はよくないと思っていたのに分からなくなった」「自分のことだけでなく他者の意見も聞くべきだ」「どの人とも仲良くなることが大切」「学び暮らせることはありがたい」「子どもたちに学ぶ機会をつくってほしい」。それぞれに真剣で、関わりを考える感想だ。

2005年5月、「平和学という聞き慣れない講義が始まった」と地元メディアが報道し、今治明德高校矢田分校など子どもたちの活躍もあって、平和学は愛媛に定着しつつあると思う。中高生の時、報道で興味をもったという学生も生まれた。

市民から「偏向しているのではないか」「軍事学を扱え」というものから、「高齢者の昔話を聞かなくて福祉みたいだ」「傾聴ボランティアだな」などのご意見をいただいた。あるおじいちゃんの自宅に招かれ、手を握られ、「あなたは良いことをやると」と何度も繰り返された時は言葉がなかった。学生はおじいちゃん、おばあちゃんの体験を聞いたがっているのだから、それに応え、3世代を繋ぐのは2世代目の大人の責任だと考えるようになった。

2. 平和学の共育と成果

ところで、なぜ学生は平和学の授業に関心を持つのでしょうか？

第1に学生の戦争体験者のお話を知りたいという声に応えることにある。松山市出身者など受講生の多くは、これまでに戦争体験者のお話をお聞きしたのは、小学校の修学旅行に行く前のたった1時間の「平和学習」の時間しかない。広島出身者の場合でも原爆攻撃が主な内容である。戦争体験者のお話は生々しく、その生の声を学生は知りがっている。松山空襲でも、広島原爆でも、沖縄の地上戦でも、大陸からの引き上げでも、まして戦場での元兵士としても、多くの人が死傷し、自らも奇跡的に生きた人たちだ。その光景を再現はできないが、体験、教訓を伝えることは大切なことである。

第2に平和学の授業内容が平和を思考するとしても、その授業方法が非平和的では本当の平和学とはならない。学生同士が学生生活や戦争と平和について感想を交流する参加型の共育を工夫し、授業に真面目に取り組むととも



平和学の授業で戦争体験を聞き紙芝居を上演
講師：加藤澄子さん（80歳）

に、思ったことを表現できるように人間同士の信頼関係を実現できるように工夫をしている。そのためにはアイスブレイクが重要である。現代の学生は授業を無難に過ごす傾向があるが、これでは試行錯誤や失敗を重ねて真理を探究することはできない。そこで、平和友好の観点から歌や舞踊、チャンゴ(朝鮮半島の代表的な打楽器<太鼓>)、カチャーシー(沖縄の手踊り)、太極拳、サルサ(キューバの民族音楽をもとにしたラテン音楽に合わせて通常ペアで踊る)などを取り入れ、多文化理解を並行して進めている。学生の対話や思考の条件は学生の気分が解放されることだと考えている。

半期 15 回の授業は大づかみで次のように構成している。

4 月の開講後には平和学の授業のついでにメディア報道や前年の元受講生の取り組みを紹介し、大学で学ぶことのイメージを共有する。

5 月の連休前後には、子どもの文化に携わっておられる宮野英也さんや加藤澄子さんをゲストとして招聘し、ご自身の戦争体験やお父さんの戦死、自身の従軍体験などのお話、戦前の国策紙芝居『七つの石』や戦後の紙芝居



えんたいごう
掩体壕 (戦中に航空機を爆撃から守るために作られた防空壕)を見学し
元第 343 海軍航空隊偵察第四飛行隊員の解説を聞く
講師：杉野富也さん (92 歳)

『白旗を掲げて』など、子ども文化を通じてお話を聞く姿勢をつくってゆく。5～6月には「おじいちゃん、おばあちゃんの戦争体験を聞く」ことを特徴として、愛媛の空襲、戦争中の紙芝居、原爆症認定訴訟、徴兵・従軍、アジアの戦争被害などの体験をもつゲストを招聘し、お話をお聞きしている。学生は「戦争体験者のお話聞けてよかった」「この講義にはまる」といった感想を寄せている。

7月には学生はそれまでの授業や戦争体験のお話を踏まえ、多様な発表を行う。探求型研究としては、戦争の要因、軍隊の仕組み、戦時中の学校・生活・地域の様子、地域の空襲、貧困と戦争、核軍縮の展望、憲法論争、基地問題などが紹介される。また実践型探求としては、戦時中の食事づくり、防空頭巾製作、竹やり訓練、バケツリレー、広島平和公園訪問など、真摯な取り組みをしている。なお、いわゆる戦争の加害や戦争犠牲者の追討と和解については、1回生後期に開講する平和学や海外研修「平和友好の旅」で扱っている。



平和学の授業で松山空襲の体験を聞く

以上のような授業の成果として、学生は次のような感想を述べている。

「自分のことだけでなく、他人の意見にも耳を傾けるべきだ」「戦争はいけないものだと思っているのに、他人の意見を聞いてわからなくなった」「戦争の原因を知り、どうすればなくなるのかを知りたい」「もっと外国の人と仲良くなるのが大切だ」「憲法九条と自衛隊について考えたい」「松山空襲の時に先輩たちが学舎を守ったことを初めて知った。私たちの学校も戦争と無縁ではない。」「平和があってこそ私達が学び生きていけることを伝えたい」「戦争や平和について大学入学まで触れる機会がなかった。子どもたちに平和のことを学ぶ機会を作ってほしい」「岩国や沖縄の基地再編を自分の問題として考えたい」

愛媛大学の平和学に興味をもっていただけただけでしょうか？ 平和学という授業ですからこそ、大学の授業にありがちな、一方通行、上位下達を何とか克服したいと工夫している。



平和学の研究発表で
思いを表現する

【紹介】

私と平和学受講生、元受講生、市民が取り組む行事を紹介します。詳細はHPを参照ください。

■ 第9回戦争遺跡保存ネットワーク四国大会 in 愛媛

<日程> 2018年6月2日(土)～3日(日)

<開催地> 松山市北吉田町など

*松山市南吉田町にはアジア・太平洋戦争時代に建設された松山海軍航空隊の軍用機を格納する掩体壕が3基ある。2016年3月、松山市議会は掩体壕1基を文化財指定する請願を採択し、今年3月、松山市は保存を決定した。請願を提出した松山掩体壕を考える会は、今後、掩体壕を戦争の悲惨さ、平和の尊さを伝える文化財として活かしたいと考えている。

■ 第48回空襲・戦災を記録する全国連絡会議松山大会

<日程> 2018年8月25日(土)～26日(日)

<開催地> 愛媛大学

*同会の目的は、「アジア・太平洋戦争において米軍が行なった日本本土攻撃(空爆・艦砲射撃などすべての作戦を含む)及びそれによる被害等の実態・真実の解明・研究・語り伝え等を目的として活動する団体・個人の連絡・交流を目的とする」(規約)ことにある。今夏、第48回大会を松山で開催し、学生・教員・市民・全国からの参加者が松山・愛媛・四国・瀬戸内ならびに日本全体の空襲・戦災を考える。(http://kushusensai.net/)

工学系研究室の ワークライフバランス について

大分大学理工学部 助教

市來 龍大



専門はプラズマ科学。プラズマを使って窒素原子を金属にドーピングし、材料の機械強度や生体適合性を向上させる技術について研究中。

学生や院生のワークライフバランスを考える

この記事を読んで下さっている工学系教員のみなさま、胸に手を置いて考えてみて下さい。

組合活動では「労働条件を改善しろー！」とか要求していながら、研究室で学生や大学院生に必要以上の業務を強いてはいないでしょうか？研究活動がハードすぎて、体調を壊してしまう学生さんを見たことはありませんか？

私が経験してきた限りでは、大学の工学系研究室の多くが昼夜を問わず稼働しており、その傾向は研究規模の大きい大学になればなるほど強い気がします。どんな分野であっても、学問を修めるためにはつらい思いをして壁を乗り越えなければならないときがあるでしょう。

しかし過労が定常化し、精神や肉体に悪影響を及ぼす程度となれば話は別です。そのような際は我々の労働環境を改善するのと同様に、学生や院生のそれについても改善する必要があるのではないのでしょうか。

恥ずかしながら私は社会科学に疎いため、きちんとしたデータやアンケート結果などを挙げながら議論する力はありませんので、ただただ自分の経験だけをベースに素朴に素朴にこの件について語ってみます。有用な知識の提供はできませんが、読者のみなさまに工学系研究室のワークライフバランスについてより真剣に考えるきっかけを与えられたらうれしく思います。

根性論で研究していいのでしょうか？

工学では成果を出すために能力のみならず作業時間を要する研究が多いことが、学生のハードワークの主な理由なののでしょうか。

装置の真空度を向上させるために毎日毎日真空引きやベーキングに数時間かかる研究はざらでしょうし、数十時間にわたる化学反応を監視するために寝ずの番をすることもあってしょうし、細胞やマウスを数週間世話する研究もあることでしょう。実験、シミュレーションにかかわらず、うまくいくパラメータを探るために何度も何度も同じ作業を繰り返す必要があるのも工学系研究の特徴です。

しかし、「作業時間を要する」という工学系研究の特徴は、国によらずどこでも同じはずで。にもかかわらず、他国の大学と比べて日本の工学部が異常に忙しくしているように思えてなりません。

経験から言いますと、日本の工学系研究室には共通して、過度な根性論が文化として根付いています。徹夜や休日返上で長時間働くことに正義を見出したり、常に忙しくしていることを徳とする傾向など、「研究するためにそれって必要？」と思える非論理的な美学が存在しているのです。

この根性論を払拭することができれば、学生もそして我々ももっと常識的な働き方ができるようになると考えています。(根性論が大学に限らず日本

全体の労働問題に影響しているような気がしますが、ここではとりあえず大学の話だけします。それしか知らないの・・・)。

午後5時に帰宅する教授

どの国がいいとか悪いとか一概には言えませんが、とりあえず根性論とは縁のない国の人の話をさせてください。

私の考え方にパラダイムシフトを与えるひと言を放った、ある海外の著名な教授の話です。私は彼と数か月にわたり共同研究をしたことがありました。その際に研究の大変さについて語り合ったのですが、驚くべきことに、その分野であれば誰でも知っているような業績をあげている先生が、「国では俺は毎日午後5時に帰宅している。」と言ったのです。当時の私にとっては、信じられないひと言でした。

さらにその教授はきちんと理由を示してくれました。「我々の学問分野には、女性教員や女子学生が少ない。その原因のひとつに、教員たちが夜遅くまで働いていることがあると思う。夜遅くまで働きたいと思っている女性は少ない。だから俺は多くの女性にこの分野に携わってもらうために、5時に帰る姿を周りに見せることにしているんだ。」私は目からうろこが落ちました。

根性論をベースに働いている研究者はおそらく「夜遅くまで働きたくない方が悪い。そんな人間は我々の分野に来なくていい。」と言うだけで、積極的に対策をしようとはしないでしょう。さらにそういう人々は、5時に帰宅する教授に対しても「楽をしようとしてるだけ」と罵りかねません。これでは何も進展しません。

それとは対照的に、この教授は根性論に一切毒されていない「5時に帰る」という手段を自ら実践して、問題を合理的に解決しようとしているのでした。この試みが功を奏したかどうかはわかりませんが、とにかく私は論理的な考え方に純粋に感動しました。(男女共同参画に通ずる目的それ自体も粹ですね。)

2 週間の春休みの意義

これはほんの一例ですが、このような経験をいくつか経た結果、私は工学系研究室に身を置きながらも根性論を少し客観視できるようになりました。

「長時間働く」のが目的ではなく、「研究を進める」ことを改めて目的に据えて考えられるようになり、また「研究を進める」ために合理的に思考した結果、「研究時間を短縮する」や「休暇を取る」という選択肢も選べるようになりました。ということで現在私は自分の研究グループにおいて、学生に積極的に休息を勧めるよう試みています。

まず私の研究グループでは、時間を要する実験がある日以外は5時以降は束縛をしないようにしています。ちなみに、多くの学生がアフター5をバイトに充てているようです。大学生がバイトすることに賛否あるかもしれませ



研究グループの写真。後列左から3人目が著者。
みんなストレスフリーの顔をしている！といいのですが…

んが、私はバイトも社会性を養うための貴重な人生経験かなと思います。それだけではなく、研究室以外の世界を持つておくことが（サークルでも構いませんが）、研究がうまくいかないような場合の心の拠り所になるとと思います。ところで幸運なことに、バイトに明け暮れて研究をしない学生にまだ巡り合っていないです。

話が脱線しました。また、過酷な実験や学会活動の後には、2～3日休暇を取るよう学生に勧めます（講義はサボらないように！）。以前はこのような取り組みは行ってなかったのですが、休暇の推進により学生はより研究や学会活動に意欲的になった気がします。私はこれに気をよくし、今年からは卒論修論が終わった後にみなで春休みを2週間ほど取ることにしました。（私も会議の合間を縫って、何日間か有給休暇を消化します。）とにかく一度研究のことを忘れて、新たな気持ちで4月から臨もうという意図です。

このように、学生が過度に苦勞しないよう意識して活動していますが、学生の学ぶ意識や実践力が低下した様子は見受けられませんし、研究の進捗がにぶった印象もありません。この点、客観的に証明することは困難ですが、私自身もいろいろと試行している段階ですのでお許しください。

さらに私自身も職場で他のことに充てる時間が増えたため、教員のワークライフバランスも改善されました。まだまだ素人考えを吐き続けますが、休暇や休息は体や脳を休めるという意味だけではなく、学生の研究に対するモチベーションを持続させるよい手段でもあるような気がします。

同じ事ばかりずっとやっていると脳がマヒしてきて、やりがいのある研究をしていても全く新鮮さや刺激が得られなくなってきます。時々休んでみれば研究を客観視する機会が得られますので、常に新鮮な気持ちで研究対象に向き合えるのではないのでしょうか。

短時間で研究成果をあげることは研究者にとって永遠のテーマだと思いますが、とにかく根性論だけは除外して考えてみることをみなさんも試されてはいかがでしょうか。

ワークライフバランスは学生時代から！

大学で学ぶ学生たちはいずれ就職先で部下を持つようになります。根性論ベースの研究室で「体を壊すまで働くのが偉い」と教えられてきた学生は、同じことを部下に強いるかもしれません。

これを考えると、研究室のワークライフバランスを考えることは社会的にも決して無意味ではないと思います。科学技術を使う人も、作る人も、そして作るために学ぶ学生も、みなが幸福を感じられるような世の中を目指したいものです！



研究グループの飲み会の写真。学生が自主的に開いてくれます。
参加するか否かは自由！酒の強要もまったくなし！

労働問題ブックガイド

高知大学人文社会科学部 准教授

岡田 健一郎



専門は憲法学。「国家による安全の実現・維持」というテーマで、戦前の日本とドイツにおける憲法学について研究。現在は戦後ドイツと日本における「憲法の私人間効力」という問題に取り組んでいる。

はじめに

今回は労働問題に関する本をご紹介します。といっても、難しい専門書ではありません。労働問題に関しては素人の私でもわかりやすく読め、なおかつ心を動かされたおススメの本です。

1. 中村圭介『壁を壊す』 社団法人教育文化協会、2009年

本書は連合新書というなかなかマニアックな新書シリーズの1冊です(あのナショナルセンターの「連合」が出しています)。本書は、連合総研による「『非正規労働者の組織化』調査報告書」をもとにしたものです(なお、この報告書はネットで全文無料で読むことができます)。

日本における労組の組織率低下の重要な原因として、非正規労働者の組織化が進んでこなかったことがしばしば指摘されています。そこで本書は、非正規労働者の組織化において先進的とされるイオン、日本ハム、ケンウッド・ジオビット(携帯電話ショップ)、市川市保育園、八王子市、サンデーサン(ファミリーレストラン)、小田急百貨店、クノールプレムゼ(商用車のブレーキ製造)、矢崎総業、広島電鉄の10ケースに注目し、その取り組みが分析しています。

いずれの事例も、成果だけでなく困難も率直に描かれていて大変面白いのですが、特に興味深かった点をいくつかご紹介します。

一つは、非正規労働者の増加にも関わらず組織化が進まないことが「集团的発言メカニズム」の危機——すなわち「非正規労働者が抱く不満、要望、意見が正規労働者にも、会社にも表明されず、その結果、生産性が低下するということ」——を招いているという指摘です(同書164頁)。例えば、あるイオンの惣菜売場の売り上げが落ち込んでいました。そこで店長らがライバル店の惣菜を買って食べてみると、自分たちの商品と全く味が違っていたのです。実はパート労働者たちはそのことに気付いていました。しかし正社員とパート労働者との間に溝があったため、情報が伝わることはなかったのです(42～43頁)。非正規労働者の組織化は生産性に関わるという視点は重要と思われます。

二つ目は、ケンウッド・ジオビットにおける非正規労働者の組織化の取り組みです(124～129頁)。同社では非正規労働者の組合員が有給休暇を取って各店舗を回り、非正規労働者(多くは若い女性店員)に開店前の時間に組

合への加入を呼びかけたそうです。しかし「組合費が高い」「組合に入るメリットはあるのか」などの質問が出て、なかなか加入してくれません。ところが「不思議なことが起こる。開店の時間が近づくと、非正規労働者たちは、組合についての理解がさほど深まっているわけでもないのに、組合費に納得したわけでもないのに、『組合に入ると良くなるんですよ』と半信半疑ながらも、加入同意書にサインをしてくれたのだ」。著者はその理由について「同じ立場にある非正規労働者が、わざわざ有給休暇を取得して、自分のショップまで来てくれた。何を言っているのかはよくわからないけれど、とにかく一所懸命で、誠実な人だということはわかる。その人がクミアイが良いというのならば、良いのかもしれない。その懸命さ、誠実さは嘘じゃない、ほんものだ。信頼してもいいみたい。だから最後はサインをしてあげた。こう解釈するしかないように私は思う」と分析しています。この箇所には賛否両論あるでしょうが、私は結構好きです。もちろん組合への勧誘には論理的な説明も必要ですが、私の経験では「懸命さ、誠実さ」が意外とモノを言うように思います。

三つ目は、2009年に書かれた本書では、正規労働者中心の組合には非正規労働者を加入させることに抵抗が強く、本書のタイトルにもなっている「壁」があるとされています。そして本書のテーマはその壁を壊すことにあったわけです。しかし2018年の今、そのような状況は変わりつつあるように思われます。もちろん非正規労働者の組織化は道半ばですが、正規労働者が大っぴらに非正規労働者の組織化に反対する風潮は弱まりつつあると感じます（もちろん組合によって差はあるでしょう）。これは裏を返せば、労働者の非正規化がメディアでも問題視され、正規労働者も危機感を抱かざるを得なくなったということでしょう。

なお、労働者の組織化に関しては、以下の本もお勧めです。

2. アレクサンドラ・ブラッドベリー / マーク・ブレナー / ジェーン・スロータ (菅俊治 / 山崎精一監訳)

『職場を変える秘密のレシピ 47』日本労働弁護団、2018年

本書はアメリカのレイバー・ノート (Labor Notes) という団体が発行した書籍の翻訳です。書名だけを見るとすると普通のビジネス書と間違えそうになりますが、そうではありません。レイバー・ノートは1979年に設立され、労組の組織化や効果的な活動のサポートなどを行っていますが、本書はそのコツをわかりやすくまとめていて、戦略の立て方、効果的な勧誘の仕方などは非常に役立ちます。一方で「近道はたいてい遠回りに終わり、それは行き止まりに続いている」(フレッド・ロス) というように、地道な活動を試行錯誤し、継続していくことの大切さを説く点も印象的です。アメリカの労働法制や最新の労働運動なども紹介されていて勉強になります。

最後に、もう一つ印象に残った言葉をご紹介します。「労働者は自分たちが公正で賢くしていれば正当な扱いを受けられると信じたがるものです。でもそれでは不十分です。自分で自分に力を与えることはできないのです。力は経営側から奪い取らなければなりません」(ヘッティ・ローゼンスタイン)。

3. 沢村凜『ディーセント・ワーク・ガーディアン』双葉社、 2012年 (双葉文庫、2014年)

最後は小説です。主人公は、地方都市の労基署に勤める労働基準監督官です。組合活動でも監督官と会う機会があるかもしれませんが、その内幕は見えにくいのではないのでしょうか。本書では、監督官らがどのような思いを持ち、どのように活動しているのかが描かれています (あくまでフィクションですが)。本書を読むと、労働行政についても勉強になりますし (例えば、分限審議会の同意がないと監督官を罷免できない、など)、人間ドラマとしても面白いです。

監督官の仕事の中心は、労働法を使用者に守らせることにあるわけですが、そこには経営コンサルタント的な側面があることも興味深く感じました。例えば第四話「部下の迷い」では、最低賃金以下でパート労働者を雇っている惣菜店が問題となります。そこで主人公はその店の経営状態を調査し、次のように述べます。「とにかく、法律が守れないと嘆いたり、それをどうごまかそうかと考えたりする前に、どうやったら守れるか、知恵を絞るべきなんだ。その工夫からビジネスにもいい効果が生まれるかもしれないのに、無理だと決めつけたらそこで終わりだろう。まったく、取引先の納期短縮やコストダウンの要請には、手段を尽くして応じるくせに、『労基法を守っていたら経営は成り立ちません』と、遵法についてだけ最初からあきらめるのはどうしてなんだ」。同感です。

近年、日本の労働生産性の低さが指摘されていますが、その原因の一端は、EUなどと比べて労働法が甘く、その甘い労働法さえもしばしば破られ、それが見逃されているために、使用者が「働かせ方」を工夫せずに済んでしまったことにあるのではないかと私は考えています（例えば長時間労働）。労働法を再強化し、なおかつ監督官を増員するなどして規制をきちんと守らせることが、実は生産性の向上にもつながるのではないのでしょうか（もちろん、生産性の向上それ自体が良いことなのかへの賛否はあると思いますが）。

（なお、監督官の仕事ぶりを描いたものとしてはマンガの『ダンダリンー〇一』（原作：とんたにたかし、作画：鈴木マサカズ）があり、2013年にはドラマ化もされています。）

おわりに

今 回ご紹介した本は、いずれも堅苦しくなく、気軽に面白く読めるものばかりです。通勤電車の中や、寝る前などに、ぜひどうぞ。

ローカル線で行く！ フーテン旅行記 17

－「西郷どん」の故郷 鹿児島県の2つの半島を巡る！－

岡山大学工学部機械工学コース助教

大西 孝



専門は機械加工（研削）。主に円筒研削や内面研削を対象として、工作物の熱変形や弾性変形に伴う精度の悪化を防止する研究を進めている。趣味は列車を使用した旅行(47 都道府県を踏破済)。

はじめに

今年の大河ドラマは「西郷どん（せごどん）」。毎回の放送を楽しみにされている方も多いと思います。今回は、大河ドラマにあやかって、西郷隆盛の故郷、薩摩の国を2回に分けてご紹介したいと思います。鹿児島県には、鹿児島湾を挟んで大隅半島と薩摩半島の二つの半島があり、それぞれに特色あるローカル線が走っています。今回は鹿児島県と宮崎県を走るローカル線の旅をご紹介します。

1. 薩摩半島で歴史を感じる！ 指宿枕崎線

まずは西側の薩摩半島を巡ってみましょう。薩摩半島は東側から南側の海沿いに指宿枕崎線（いぶすきまくらざきせん）が走っています。しかし、終点の枕崎で行き止まりの路線ですから、行きと帰りに同じ路線に乗るのも面白くありません。そこでまずは鹿児島中央駅から知覧（ちらん）行きの路線バスに



知覧武家屋敷の街並み。低い石垣の上に生垣が続き、沖縄のような光景が広がります。

乗ってみることにします。知覧は薩摩半島の南部にある町で、南九州市の市役所が置かれています。ここには複数の武家屋が敷残されており、7つもの庭園が公開されています。「薩摩の小京都」とも呼ばれ、「西郷どん」のロケにも使われたそうです。武家屋敷が並ぶ道の左右には低い石垣と生垣が並び、



知覧武家屋敷で公開されている7カ所の庭園のうちの一つ。赤い鮮やかな花が咲いている辺りに南国らしさを感じます。

沖縄に来たかのような錯覚に襲われます。これは知覧の港が琉球と交易をしていたため、沖縄の影響を受けているためだと「知覧武家屋敷庭園」のホームページで説明されています。国の名勝に指定された庭園は奇岩が並んだ独特の光景を楽しむことができるほか、

保存されている建物も、1700年代中期の武家屋敷の特徴が残っている貴重なものです。

知覧と言えば、もう一つ忘れてはならない場所があります。知覧は太平洋戦争末期に特攻隊の出撃基地の一つとなり、400名余りの特攻隊員がこの地から帰らぬ攻撃に出ました。「知覧特攻平和会館」では当時の戦闘



知覧特攻平和会館。平和な時代だからこそ訪れておきたい場所です。



知覧町を流れる麓川を望む。かつて特攻の出撃基地があったとは思えないような穏やかな光景が広がります。

終点である枕崎へバスで向かいます。知覧から枕崎へ直接向かうバスは運行本数が少ないので、まず加世田（かせだ）行きのバスに乗り、そこで枕崎行きに乗り換えます。加世田のバスターミナルは、かつて薩摩半島の西岸に沿って枕崎まで走っていたローカル私鉄の駅の跡で、当時の車両がバス乗り場の横に保存されています。ここで枕崎行きのバスに乗り換

機や隊員の遺書、遺品などが多く展示されており、大戦から70余年を経た今も、平和の尊さを訴えかけてきます。太平洋戦争中に若い特攻隊員がどのような気持ちで出撃したのだろうと思いを巡らせると、平和な日常がいかにありがたいものであるかが身に染みます。

知覧からいよいよ指宿枕崎線の



加世田のバスターミナルに保存されている鹿児島交通枕崎線の鉄道車両。かつては薩摩半島の西岸にもローカル私鉄が走っていました。

えます。

枕崎駅は、短いホームに線路が1本だけの駅舎もない行き止まりの駅です。ここから鹿児島中央まで2時間半余りのローカル線の旅が続きます。枕崎を出てしばらくすると、左手には薩摩富士とよばれる開聞岳（かいもんだけ）が見え、JR最南端の駅として鉄道ファンに名高い西大山駅に到着します。最南端の駅と



指宿枕崎線の終点である枕崎駅。かつては私鉄の鹿児島交通と接続していましたが、今ではホームが1本しかない終着駅です。



指宿枕崎線の車内から眺める開聞岳。薩摩富士にふさわしい、おむすび形の山です。

言っても、短いホームに記念碑が建っているだけの駅ですが、この簡素さがローカル線らしく印象に残ります。砂蒸し温泉で有名な指宿を出ると右手には海が広がり、いつまでも乗っていたい南国のローカル線の旅も、鹿児島市内に入り終点に到着します。

(岡山大学職員組合 組合日より218号より加筆のうえ再掲)



JR線最南端の駅、西大山。草生した線路に短いホームが一本だけというローカル色あふれる駅です。

2. 宮崎県から大隅半島を巡る！ 日豊本線 / 日南線

今度は鹿児島湾を挟んで東側に突き出した大隅半島を回ってみましょう。大隅半島には国鉄時代、西から順に大隅線、志布志（しぶし）線、日南（にちなん）線の3つの路線が日豊本線から志布志駅に向けて伸びていました。しかし国鉄が民营化される直前に、大隅半島の西岸を走っていた大隅線と、半島の中央を縦断し



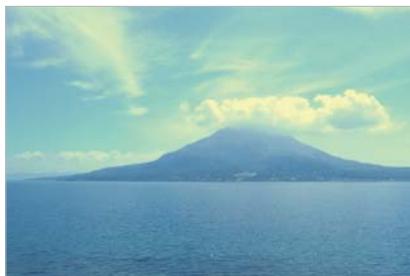
小倉から続く日豊本線の終点となる鹿児島駅。右奥の駅舎は小さいですが、駅前には鹿児島市電が発着し、独特の旅情を誘う駅です。



鹿児島駅のホームへ入る都城行きの日豊本線の普通電車。日中は2両編成のワンマン列車が運行されています。

井駅は鹿児島県にあり、大隅半島に残る唯一の鉄道路線です。今回は鹿児島駅から日豊本線に乗り宮崎駅へ向かい、そこから日南線で志布志駅へ行き、さらに路線バスへ乗り換えた後、大隅半島の西岸にある垂水（たるみず）港から鹿児島湾をフェリーで横切って鹿児島市へ戻ります。

ていた志布志線は廃止され、唯一、大隅半島の東岸を走る日南線のみが残っています。日南線の起点は鹿児島島から遠く離れた南宮崎駅で、路線の大半も宮崎県にありますが、終点の志布志駅とその一つ手前の大隅夏



日豊本線の車内から望む鹿児島湾（錦江湾）と桜島。何度通っても見飽きることのない、国内屈指の絶景の一つです。

日豊本線は小倉駅から大分県、宮崎県を経て鹿児島駅までを結ぶ長大路線です。日豊本線の終点は鹿児島駅ですが、日豊本線の列車は鹿児島本線へ直通して、次の鹿児島中央駅に発着します。鹿児島駅は小さな駅ながら、多くの人が行きかう鹿児島中央駅の賑わいとは異なる旅情があります。鹿児島駅を出ると、車窓の右側には鹿児島湾と桜島が広がります。かつて大隅線が志布志へ向けて分かれていた国分（こくぶ）駅を出ると、霧島山地の山越えにかかり、うっそうとした森林の間を



日豊本線の西都城駅のかしまめし。そぼろではなく甘辛く煮た鶏肉が載っており、北九州のかしまめしとは違う味が楽しめます。



日南線から海を望む。油津駅の辺りでは奇岩が海の上に見えます。

走り宮崎県へ入ります。山を下りた西都城（にしみやこのじょう）駅は、かつての志布志線の分岐駅です。ここで宮崎方面の列車と乗り換えるために途中下車しますが、名物「かしまめし」を駅弁屋さんで買ってみましょう。そぼろがご飯に載った九州北部のものとは異なり、西都城のかしまめしは甘辛く

煮た鶏肉がご飯の上に載っていて、忘れがたい味です。ここからさらに1時間ほど普通列車に揺られ、宮崎へ着きます。

志布志方面へ向かう列車は宮崎を出ると大淀川を渡り、南宮崎から日南線へ入ります。途中の青島駅の付近では日南海岸の変化に富んだ海岸線が見られるほか、油津駅を出ると遠くに奇岩が並ぶ様が見えるなど、南国の海岸線に沿って楽しい



日南線の終点、志布志駅に到着。かつては大隅半島を走る3路線のジャンクションでしたが、今やホームが1本だけの侘しい駅です。

列車の旅が続きます。宮崎から3時間足らずで終点の志布志駅に到着しますが、この駅はかつて3本の路線が発着したとは思えない、ホームが1本だけ

の侘しい駅です。

志布志から路線バスに乗り継いで、大隅半島の中心の鹿屋（かのや）市を経て、大隅半島西岸の垂水港へ向かいます。この路線バスはかつての大隅線をたどる経路を走っており、鉄道時代に思いをはせながら、夕暮れ迫る大隅半島を縦断します。

垂水港では、鹿児島行のフェリー



垂水港からはフェリーで鹿児島湾を横断し、鹿児島市内へ戻ります。暮れなぞむ港へフェリーが入ってきました。旅情を感じる光景です。



鹿児島湾を横切るフェリーの甲板から眺めた桜島。夕日にうっすらと桜島から立つ噴煙が見えます。

を待ちます。夕日の中、鹿児島からのフェリーが姿を現しました。フェリーの上からは噴煙を上げる桜島が夕日の中にシルエットとなって映えます。今回は一度宮崎まで行き大隅半島をめぐりましたが、鉄道、バス、フェリーと変化に富んだ楽しいミニトリップでした。（岡山大学職員組合 組合だより 219号より加筆のうえ掲載）

おわりに

大河ドラマに限らず、ドラマや映画の撮影が行われた地域は高い関心を集めることがあります。その土地をローカル線で訪れ、地元の風物に触れながらドラマを取り巻く世界に思いを馳せるのも良いかもしれません。岡山大学職員組合の旅行記では、過去に朝の連続テレビ小説「あまちゃん」で取り上げられた三陸鉄道（Vol.39 No.4）や、映画の「男はつらいよ」でお馴染みの柴又駅（Vol.39 No.2）をご紹介したことがあります。ドラマや映画を通じて地元を走る鉄道にも目を向けていただければと思います。

原稿募集

全大教時報編集部では、各大学・高専・大学共同利用機関の具体的な動き、取り組みなど多方面からの原稿を募集しております。下記投稿要領によって、積極的にお寄せください。

❖投稿要領

- 文体 自由
- 字数 本文については、以下を基準とします。
2頁 2000字 4頁 4000字
5頁 5000字 6頁 6000字
- 原稿締切 毎奇数月・15日
- 掲載 投稿の翌月号（但し、投稿が多数の場合は次号）
- 謝礼 規程により謝礼（図書カード）を進呈します。
- その他
 - ①投稿原稿は返却いたしません。
 - ②投稿にあたっては、標題、投稿者氏名、所属大学・高専、又は機関名の明記をお願いしております。

全大教時報

第42巻1号 2018年4月10日
(大学調査時報・大学部時報通算226号)

編集・発行 全国大学高専教職員組合 電話 (03) 3844 - 1671
〒110 - 0015 東京都台東区東上野 6 - 1 - 7 MSKビル7階

第39巻6号（2016年2月）までについて、冊子の購入ができます（一冊500円）ので、ご希望の方は事務局へお問い合わせください。

郵便振替口座 00170-6-18892



全国大学高専教職員組合

Faculty and Staff Union of Japanese Universities